

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	わが牢獄観 : 論説
Author(s)	高田, 保馬
Citation	龍南會雜誌, 106: 18-26
Issue date	1904-05-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5690">http://hdl.handle.net/2298/5690</a>
Right	

# わが牢獄觀

高田保馬

十八

「一」

論

説

マヨンハワードを知らざるものありや。

一千七百二十六年九月二日、曉天の彩雲聲なうして流れゆく時、英京倫敦を去ること三里、ハックチーの森林の微風は呱呱の聲を傳へたり。其聲の微なりしが如く微なりし幼き軀は、名けてマヨンハワードと云ひき。知らずや、彼こそは慈悲の化身、博愛の權化、熱情の凝塊。

重且大なる天の使命をもたらせるものは、常に之を自覺し遂行せざるを得ざるべき運命を賦與せらる。我ハワード氏、青春二十九歳、情激し意氣紅焔の如かるとき、葡國の首都リスボン、地震火災海嘯並び至りて、人畜の悲鳴全歐の天地に震ふ。即ち、奮然幾方の同胞を悲惨の幽穴より救はむとし、病軀を抱いて蹶起之に赴きぬ。時や偶英佛戦争の當時、硝煙暗澹としてドーバール海峽を鎖し、波浪騒然として寧日なし。端なくも、氏か乗船は佛の巡邏船に獲られて、乗客尽く牢獄に投せられぬ。此遭難を以て不幸なりとなす勿れ。我人類の恩人が天命に對する自覺の眼はこのときはじめて開け、赫々たる勳業はこの時に端緒を發したれば也。幾年間の暗黒なる地下室の酸苦なる經驗は、彼が滿身の愛を驅りて天下の牢獄制度に對する憤慨の念となしぬ。

甘きこと蜜の如き滿身の愛は、何故に憤慨の血とならざるを得ざりしか。思ふに、彼が牢獄に對す

も饑饉と癡癡刻毒なる當時の牢獄の事實とは、其差異水火よりも甚しかりき。それ水火との間に調和を見出さむとするは愚ならずや、焉ぞ激昂と發憤となくしてやまむ。たゞ此の如きのみ。澎湃として急放奔逸、或は巨舶を覆へし、白帆を呑み、人を殺し、島を噛み、滔々鳴りて止まざる激浪を以て、漁歌遙に暮れて晚霞靨、星光眠れる細漣の洋々たるを、全然之異質也と云ふものは誰ぞや。多涙多恨のロベスヒーアは、一面豪膽果決峻嚴にして一步もかさず、溫和黨の膽をして寒からしめし烈丈夫に非ずや。優柔不斷の二女子ジャンダークは勇往邁進三軍を指揮して、矢石の間に佛帝國の生命をつなぎとめしに非ずや。我ハワード氏が熱烈なる憤慨は其質依然として眞愛なるのみ。まじことや愛は蜜にして一面また血也。

事もとより素志の十一に足らざりしと雖、東奔西馳、南船北馬、畢生の精力をさぶげて監獄の改良に従事し、遂に一千八百八十九年、故山を距る千五百哩、四顧荒寥なるチエルソンの地、溘然として小なる三角塔下に永眠しぬ。あゝ彼の肉は遂に亡びたり。されども、自然に合一せる其靈と、及び其熾烈なる熱血もて世界史上に特筆したる其名とは、それ岩が根日輪にとけなむ日ありともいかに亡ぶべしや。

あゝ慈悲の天使ハワード、其呼吸を地上に絶ちてより、春風秋雨こゝに一百、青史はひとり彼をして其名聲を擅にせしめぬ。たゞへば、朝、天の戸清くひらけて、明星の光芒燦然下界の夢をてらせども、一碧また他の一微光をだに止めざるにも似たりや。借問す、牢獄のこと、今や理想の極致に達して一事の之に手を下すべきものなしとなすか。私利と、私慾と、權勢と、名譽との外、何物を

も知らざる現代の文明に媚るものよ。廣野を西する小川の聲をきいて、靈の私語を認むる能はざる肉の人よ。口を噤んで然りと答ふること勿れ。其一聲ころは一步く、我世界を惡魔の配下に導くものなれば也。滅亡の深淵に直進せしむるものなればなり。

下界の汚穢をいとひて夕な夕な翔翺する天雲の影を望むもの、肉の低卑を脱離して靈の崇高に就かむとするもの、問はむ牢獄の意義とは何ぞ。之を渺たる東洋の一孤島に見る、五十餘の監獄と、數個の集治監と、足跡の到る所盡く羅布せられざるなし。煉瓦の高樓巍然として困々焉、室々相連つて盤々焉、周壁瓦上に釘を加へ、枳棘更に其外に植ゑらる。呼鈴擊拆、鏘々たり、憂々たり、日出でて、帶劍鑢々、鎖音鏗々、日入りて而してやむ。所謂天下の罪人と稱せらるるもの、盡く收められてこの中にあり。此牢獄の現態、果して博愛と仁義とを意味せるか。第二のハワードをして慨然として勇躍奮起せしむるものなきか。

## 『二』

思ふに、一事の微一物の細と雖、社會のこと盡く、其時代の思想と形式とを打槌して一九たらしめたる結果ならざるものなし。見よや、破壊と滅亡とを命じて、颯々たる朔風は悲愴なる進軍の曲を奏し、茫々たる枯野を亘りゆく時に當り、一たび東天の星白みゆく曙、五彩の雲地上にをりたちて佐保姫か春のみ草、聲なく廣原を過ゆけば、世はこゝにはじめて蘇醒して生命と希望と光明とを賦與せらる。若草はその息吹に地下よりよみかへり、死したる梢は熱血再び湧いて、蕾はおもむるに開ちたる唇に微笑をたよふ。晚霞新しき夢を包み、曉潮歡樂の韻あり。あゝ融々たる春光の裡、

何物かみ神の化現ならざる。更に見よや、深夜、靜座默想、やかて刀をとりて一片の大理石に向ひたる工匠がわざ、其神韻は胸より腕に、腕より刀に、刀より彫みゆく像に傳はりて、一指一眼、盡く皆彼が崇高なる理想と潑刺たる生命とを包藏し含蓄せざるはなし。

時代が其民衆の叫喚にさいてたち、靈の呼吸と無限の大鑿とを以て萬象にのぞむ時、動かざるもの、走るもの、翔るもの、流るるもの、皆其命するがまゝに變化せらる。區々たる一物を捕ふるも、之を精細に攻査せば、必ずや疑ふ可からざる時代の形式と、溢れむとする時代の精神とを認むるを得む。あゝ此の如し、時代を外にしては物みな其存在なき也。現代の牢獄々見ることは即現代を見ることのみ。

## 『三』

吾人をして現代に對する觀察を大膽に告白せしめむか。曰く、吾人は二十世紀文明を呪咀する念に堪へざる也。誠に、立てる人類をして匍匐せしめむとするもの、屋内の居をすて穴下に宿らしめむとするもの、天を仰げる眸光をして汚泥の低きに俯せしめむとするもの、之所謂廿世紀文明に非ずや。時は昔にかへる一千九百年、橄欖峯頭青嵐颯として曉天にさねゆく時、燦然たる星光神の子が胸中に宿りて、一冊の經典に無限の生命を與へてより、其文字はさながらにして時代より時代に傳へられぬ。されどもろは眞生命を缺如したる空文字のみ。神聖と崇美とを以て裝飾せらるべき經典は、見よ、肉を以て包被せられ塗布せられたれり。之を誦讀するもの、肉を見て叫びて曰く、之聖經の神髓也と、此の如き傾向は之を歴史に見て何れの時代にも認め得べしと雖、其弊や、星霜と

共に増長し來りて、殊に物質の外精神をさとらず、万象の外或物の存在を認めざる、極端にして劣等なる二十世紀文明に於て今や將に其天頂に達せんとしつゝあるなり。加ふるにそれ、南方のコーラン、吹き捲く沙塵の底に埋れ去りて、古昔の劔はさびに錆びたり。菩提樹下却火洞然として古聖をたゞしめし昔のあと、梢を漏る星辰の影長はに若うして老いゆく末世の澆季を歎せしむるのみ。こゝに於て自由平等博愛を唱へて自我を犠牲に供せむとしたるドストイヴスキ、禁慾的の原始基督敎を唱へ *Resist not evil* の三大文字を標榜して立ち、以て紛々たる現代文明を痛罵したるトルストイ、彼等の眼は汚泥沮洳の中にあるも、遂に天半の白雲に思を翔けざるを得ざりしもの、あゝ豺狼かけりて白日路を行く、彼墮石を遮れ、瀑布を止めよ、聖者の叫日に急なりと雖、人間の墮落はアルプスの雪崩の如く、それ何んか底止すべき。權力を渴仰し、金錢の崇拜に溺れ、舉世滔々、赤裸々たる主我的肉慾の一凝塊、主義なく、信仰なく、節操なく、把持なく、索然として人生の興趣全く空し。眼をあぐれば、心をいたましむる哉滿目の光景。蕭條として吾人か行路、諧々たる幽禽の聲調、馥郁たる野花の芬香、焉にか之を求むべき。平沙垠なき荒漠のデザルトを辿りゆく隊商にも、之を慰むるに草緑に泉湧き出づるオーシスはありと云ふを、我世の何ぞしかくあれにあれたるや。其主我的肉慾を根據として、人は人どせめぎ、國は國ど争ひ、民族は民族ど鬭ふ。何人か現代の平和を見よとは云ふ。颶風の將に起らむとする時、飛雲徂を停め軟風ひそみて萬籟寂たるをしも平和と云ひ得べくんば、これ尙平和と云ふを得べけむ。さはれ、沈黙の中に嫉視あるを見ずや、笑聲歡語は虎視眈々の外装なりと知らずや。肉に酔へることかくの如き坤球の上、猷身的眞愛を覺めむこ

と斷乎としてこれ、善に就きてエトヲスを求めむとすると相等しき背理也。而して現代の文明をしてかゝる状態に陥らしめしものは、愛を以て生命とすべき人類が、誘惑と邪慾との爲に愛をすてしめられたる根本の誤謬これなり。吾人が廿世紀文明を呪咀せむとするもの、全く之にあつて存す。呪咀せらるべき現代文明の大鑿によりて形式を彫刻せられ、其呼吸によりて活動を與へられたる凡ての事物は、かくて盡く幾多の小なる現代の摸像也。牢獄を見んが爲に現代を見たる吾人は、其牢獄が眞愛を没却し、仁慈を無視せる、悲惨と、没道義との上に建設せられたることを斷言して憚らざる也。この背理なる牢獄を論すべく、しばらく吾人をして事實につかしめよ。

## 『四』

吾人は牢獄に投せらるゝ、罪囚のものに就て、大に疑問を挾まざるを得ず。而して第二の問題は、牢獄の待遇が非人道なることに關す。此二点よりして攻査するとき、白痴ならざる限り、何人ど雖現代牢獄の背理に關し、寸毫の異論を唱ふるものなからむ也。

全じく生を承くるや横目にして縦眉、胸腔は心靈の波動を湛ふるに足り瞳光遙に永遠の未來をのぞむべき天性を有し、四肢は理想の境域に邁進すべき自在の活力を賦與せらる。而も彼や一旦誤りて牢獄の人となる、され彼がはじめ、鶏唱若き森の曙、呱呱の産聲を擧ぐる時、清純にして潔白、假令ば深山かくれ巨岩の間より迸り出づる眞清水の一片の浮塵をも許さざるかごせ、眞にこれ天真流露の極致、古の詩人が深林の中天樂洋洋たり嬰兒はそこの邪念をつくる餘地なしと云ひけむるれに非ずや。加ふるに彼がうら若き兩親は、明けゆく天の戸を清み、微に残れる明星の光芒に祈り

て、子か行末に昊天の冥寵あらむ事を願ひ、一たびはその子か錦衣を撫で、冠塵を拂はむことを豫期せしなるべきに、彼をして光明の恩澤をすてく暗黒の領域に陥り、名くるに囚人てふ人生最不祥の文字を以てせらるゝに至らしめしもの、うもく何の故ぞ。

社會の問題に對し、滿腔の熱誠を以て其研鑽に従事せる仁人は、犯罪の原因を説いて左の五箇となしたり。

### 犯罪の原因

- 一、遺傳によれる悪性
- 二、劣悪なる家庭の感化影響
- 三、教育の不足
- 四、悪友との接近
- 五、飲酒

之が細叙を試みむは徒勞の事に屬せむ。さばれ、遺傳と云ひ、家庭と云ひ、教育と云ひ、悪友と云ひ、飲酒と云ふもの、まことに彼等に取りて如何許強大なる誘惑なりけむよ。而も吾人は、此五者を以て到底第二の原因を形成するに過ぎざるを確信せむとす。即五者のいづれにも、其根蒂にひるごりて流れたる誘惑の泉は、「貧」てふ一大事實に非ざや。貧にして根本の素因をなすなくば、父母に受けたる染色体の悪部分も何の必要ありてか活動を試みむや、焉ぞ風波あり紛争ある家庭を見むや、倫常の義仁愛の道耳にせざらむと欲するも得むや、鼠竊狗盜の族如何にして之を同輩に求むるを得むや、「余は出獄す皆の衆さらば吳も酒は絶つべきぞ」とのフライトンウエル監獄の壁書何等の教訓をも値することなむ。心あるもの更に一瞥を犯罪就縛者の數に及ばざば、益此事實の確な



るを信し得む。犯罪の大部分を占むるものは、竊盜、詐欺取財、強盜、曰く何々、尽く直接に金錢に關するものに非ずや。彼等をして盡く富ましめば、吾人焉ぞかゝる不祥の言辭を諸賢の面前に弄することあらむ。

誠に貧しきものは禍なるかな、混濁の汚水に注ぎ行く清泉の流を見送りて水の運命を憂ふる者は、來りて與に貧者が爲に痛哭せよ。近世工業隆興の洪潮は洋の東西を氾濫し終りて、こゝに勞働賃錢の低落は宛ら急瀑の墜下するか如く、滔々として底止する所をしらず、工業的豫備兵の數日に月に増加せむとす。貧しき者、藝能と體軀とを抱いて資本家の門に走るや、營々として命惟從ふもの、終年一日の寧日なし。朝、星を載いて出で、夕、月をふみて飯る、さはれ低額の勞銀は、到底死の來襲をまつに非むば半日の安靜と逸樂をも許容することなけむ。晴夜の星辰屋背をもれて不滅の寒燈をかゞげ、柴扉風雨の腐蝕に放棄す。形容枯槁、蓬髮蒿目、人生快樂のこと全く聞くべからざるなり。此時に當り、微塵の悲運のもし彼を襲ひ來るあらば、彼は何によりて家し、衣食すべきぞ。或はそれ、一身の饑餓凍餒耐忍して徐ろに運命の作爲に任せうべしとするも、人生已に妻子あり、自己の愛は彼等にあり、何故に彼等をして生活を得せしむる能はざるか、運命に對する彼が哀訴は、極點に達して煩悶となり號咷となる。世を去らむか、妻子と共に世を去らむか、生を冀ふ心は昊天により賦與せられたるを奈何。よし、わがかひなわが身みなこれ自己の命する所に從ふものに非ずや。

あゝかきかすや義人チャールズキングスレーが聲、何ぞ其慈悲の深厚にして詩調の悲愴なる。一句一

句、胸臆深く、同情の念を刻むを覺さずる。

We quarrelled like brutes, and who wonders?

What self-respect could we keep.

“Our daughters, with base-born babies,

Have vanbeted away in their shame;

If your misses had slept, Squire, where they did,

Your daughters might do the same!”

(未完) (卅七年五月二日稿)

わが愛するものゝ聲あり

すなはち門をたゞきて云ふわが妹わが佳耦わが鶼わが完きものよわれの爲に開けわ

が首には露みちわが髪に毛には夜の點滴みてり

(ソロモンの雅歌五章より)

